

〔論文〕

コーネル・ウエストによる アフリカンアメリカンの社会思想の系譜

大 宮 有 博

名古屋学院大学商学部

要 旨

本論ではコーネル・ウエストの視点から、W. E. B. デュボイス、マーティン・ルーサー・キング Jr., マルコム X という3人のアフリカンアメリカンの社会思想を俯瞰する。その上でアフリカンアメリカンの社会思想がアフリカンアメリカンの経験を基に、彼らの苦境の原因であるレイシズムという悪を批判し、その苦境からの解放に強い関心を抱いていたことを明らかにする。デュボイスはアフリカンアメリカンの抱える問題を二重意識という概念で表し、「才能ある十分の一」による解放を唱えた。またキングは、アフリカンアメリカン教会の神学を基盤にしてリベラル・キリスト教思想やガンジーの非暴力、預言的市民宗教を取り込んで公民権運動を道徳的に導いた。最後にマルコム X はアフリカンアメリカンに、精神的回心を強く勧めた。彼はアフリカンアメリカンたちの怒りを正しい方向に導くよう努めた。またウエストは、アフリカンアメリカン文化が社会変革の力を持つことを明らかにした。

キーワード：コーネル・ウエスト、W. E. B. デュボイス、マーティン・ルーサー・キング Jr., マルコム X

Cornel West's Vision of the Genealogy of African American Social Thought

Tomohiro OMIYA

Faculty of Commerce
Nagoya Gakuin University

はじめに

コーネル・ウエストがその才能をアメリカのアカデミズムにおいて発揮し始めて30年以上が経つ。そして今も、彼はアメリカの批評界で影響力を持っている。しかし日本でウエストの名を知る者は少ない。その証拠に、彼の著作の日本語訳はたったの2冊である。また2008年来日した際にも、思ったほど大きく取り上げられなかった。海外の思想家を脱政治化して受け入れる日本のアカデミズムにとって、今もアメリカの反貧困運動の「闘士」として闘うウエストは受け入れ難い存在なのかもしれない。またラップのCDを発表したり、映画に出演したりする彼の姿は、「軽いタレント知識人」のように映っているのかもしれない。

しかしアメリカ現代思想を理解しようとする際に、彼の存在を無視することはできない¹⁾。ウエストは体系的な大部の著作は書かない。むしろ様々な方法論を柔軟に取り込みながら社会状況を分析した断片的な論文を、状況の変化に遅れることなく発表する。ウエストはネオプラグマティズムやカルチュラルスタディーズの手法を用いてマルクス主義を脱構築し、レイシズムや貧困問題、キリスト教全体の状況に対して発言する。彼の発言はアフリカンアメリカンのみならず、アメリカのリベラル層に影響力を持っている。

本論の目的は以下の2点である。まず、W. E. B. デュボイス、マーティン・ルーサー・キング Jr., マルコム X という3人のアフリカンアメリカンの社会思想に対するコーネル・ウエストの批評を通して、彼らが同胞たちの経験をどのように捉え、解放への道筋をどのように示したかを明らかにする。ウエストはこの3人の思想をいくつかの歴史的ファクターや思想のトレンドが融合して生成されたものとして捉え、その生成の現場を明らかにしようとしている。次に現代を預言者の指導者不在の危機の時代であるとするウエストが、この3人の社会思想を通して、アフリカンアメリカンの社会変革の力として見出したものを明らかにする。

本論の結論を先に述べると、アフリカンアメリカンの思想家たちは、アフリカンアメリカンの悲しみや苦しみを経験を基に、彼らの苦境の原因であるレイシズムという悪を厳しく批判し、その苦境からの解放に強い関心を持ってきた。またウエストは、アフリカンアメリカン文化が社会変革の力を持つと考えている。

本論の意義は以下の通りである。日本で出版されている社会思想史の教科書は、社会のマイノリティによる社会批判について紙幅を割いていない。したがって私たちも、アフリカンアメリカンを含む社会のマイノリティには社会思想などないと思い込んでいる。しかしアフリカンアメリカンの知識人たちは、南北戦争以前の時代から現代に至るまで、アメリカ社会の差別と暴力を批判的に捉え、その上でそういった問題に対してどのように対処すべきかを提起してきた (PD: 15-22)。そうした意味で、アフリカンアメリカンの社会思想は極めてプラグマティックである。アフリカンアメリカンの社会思想の系譜に着目することが、この社会にマイノリティとして生きる者の持つ社会批判の力と解放の論理の発見につながる。

1) ウエストについての導入的解説は、栗林、2004: 78-84を参照。

1. W. E. B. デュボイス

デュボイスほどコーネル・ウエストの著述の中で繰り返し批判的に言及されているアフリカンアメリカンの社会思想家はいない²⁾。それは2つの点で、デュボイスがウエストの先駆者だからである。第1にデュボイスは、アフリカンアメリカン学 (African American studies) の基礎を築いた。今ではアフリカンアメリカン学は確固たる研究領域として認められ、主要大学には独立した学科が設置されている。ウエストもハーヴァードやプリンストンで全学教授 (University Professor) として、おもに宗教学とアフリカンアメリカン学を講じてきた。第2にデュボイスは、プラグマティズムやマルクス主義をアフリカンアメリカンが抱える問題の分析と彼らを解放するための理論に援用したという点でもウエストの先駆者である。こうした点をウエスト自身が認識しているからこそ、ウエストはデュボイスに対する遠慮のない批判を展開することで、自身の研究だけでなくアフリカンアメリカン学全体の止揚を試みているのである。

1.1. アフリカンアメリカン知識人を貫く課題としての人種の問題

デュボイスとウエストの問題意識は大きく重なっている。ウエストは、以下のデュボイスの『黒人のたましい』 (*The Soul of Black Folk*) の冒頭部分をしばしば引用する。

彼らは、ためらいがちに、わたしに近づき、わたしを好奇と憐びんの目で見つめる。そして、直接に「厄介者あつかいされると、どんな気持ちになるもんですか？」と聞くかわりに、こう言うのだ。「わたしの町にはすばらしい黒人が住んでいます」。(DuBois 1903, *Writings*: 363 = 1992: 13)

この「厄介者 (a problem) になるという奇妙な経験」について、大衆向けジャーナルのスタイルで明らかにすることが、デュボイスの主著『黒人のたましい』の課題である。アメリカにおいてアフリカの末えいとして生きるということは、奇妙な経験である (AE: 142, RM: 5-6 [20-21])。この「奇妙な経験」を、デュボイスは以下のように説明する。

……黒人は、このアメリカの世界に、ヴェールを背負い、未来を見とおす目をもって生まれでた、いわば第七の息子であった。アメリカの世界—それは、黒人に真の自我意識をすこしもあたえてはくれず、自己をもう一つの世界 (白人世界) の啓示を通してのみ見ることを許してくれる世界である。この二重意識、このたえず自己を他者の目によってみるという感覚、軽蔑と憐びんをたのしみながら傍観者として眺めているもう一つの世界の巻尺で自己の魂をはかっ

2) とりわけウエストが「他のどの論文にも増して重要な論文」と位置づけている論文が、デュボイスに対する批評論文である “Black Strivings in a Twilight Civilization” である点は、デュボイスの思想がウエストの思想の形成に重要な役割を果たしていることを如実に示す。

ている感覚。このような感覚は、一種独特なものである。彼はいつでも自己の二重性を感じている—アメリカ人であることと黒人であること。二つの魂、二つの思想、二つの調和することなき向上への努力、そして一つの黒い身体の中であたたかっている二つの理想。しかも、その身体を解体から防いでいるものは、頑健な体力だけなのである。(DuBois 1903, *Writings*: 364=1992: 15-16)

この二重意識を強いられていることこそが、ウエストにとっての「人種の問題」(race matters)である。そしてこの問題は、デュボイスに始まるアフリカンアメリカン学、ひいてはウエストが取り組む問題である。この点で、ウエストとデュボイスの間に問題意識の一致が見られる。ただウエストは、デュボイスがこの二重意識があらゆるアメリカ人の間に広範に見られることを過小評価しているため、アフリカンアメリカンの労働者たちが自我意識を獲得するにあたって三重の壁に阻まれていることに気づいていない点を指摘する (PD: 31)。すなわち、彼らはアフリカ人としての様相や (意識していないところで) 慣習を持つということ、アメリカ人の地位を与えられずにアメリカに移されたということ、そしてヨーロッパのエートスからアメリカが疎外されているということの3つの危機を内包している。社会階級を加味して考えた場合、アフリカンアメリカンの状況は、二重意識よりもずっと複雑である。そうウエストは主張する。

1.2. デュボイス批判

ウエストのデュボイス批判の要点は次の通り (FR: 55-56)。すなわち、デュボイスの思想的基盤に (1) 啓蒙主義的エートス、(2) ヴィクトリア時代戦略、(3) アメリカの楽観主義が脈々と流れている。それゆえにデュボイスは人間の状態について正しく解釈することができず、アフリカンアメリカンの活き活きとした日常の文化に自らを十分に浸すこともできなかった³⁾。

ウエストはまず、デュボイスの思想が啓蒙主義的エートスに基づいている点を批判する。啓蒙主義者は合理主義的思想が広がりさえすれば、アフリカンアメリカンが直面する貧困や差別といった問題は解消され、貧困や差別のない理想的な社会が築かれると考える。したがって、啓蒙主義にとって教育は鍵である。教育を受けたアフリカンアメリカンは、知識を身につけて豊かになり、残りの無知な同胞を指導し、その生活もまた豊かなものにする。また白人の持つ差別意識や人種についての間違った見解は、科学的・体系的調査と研究に基づいた教育によって解消されると考えられる。こういった考え方がナイーヴな幻想であることは、ウエストの指摘を待つまでもない (FR: 60-61)。

3) ウエストは、デュボイスがアフリカンアメリカンの日常の文化に自らを十分に浸していないと批判する。しかし、『黒人のたましい』所収のエッセー「進歩の意味」には彼がテネシーで見聞したことが述べられている。したがって、デュボイスはアフリカンアメリカンの日常に自らを浸しながらも、彼らの解放の道筋を考える時になるとウエストの指摘の通り啓蒙主義的エートスやヴィクトリアの戦略に捉われてしまったのである。これは時代の限界とも言える。だからこそ、後述するようにマルクスとフロイトを知ったデュボイスは、その理論をアフリカンアメリカン解放の理論に用いるのである。

しかしデュボイスは南部のアフリカンアメリカンの苦しみ、とりわけリンチの現実を直視する中で⁴⁾このような啓蒙主義的エートスを放棄し、代わってマルクスやフロイトが彼の思想に影響を及ぼすようになった (FR: 63)。マルクスは資本家と労働者の間の不平等な関係を批判した。またフロイトは、自己と社会における理屈に合わない力を理性によってコントロールする仕組みを明らかにした。デュボイスにとってこれらの理論は、アメリカと世界中のアフリカ人が抱える問題を適切に解釈するための手段となった。

このような啓蒙主義の世界観に基づいたデュボイスのアフリカンアメリカンの解放理論は、ウエストの呼ぶところの「ヴィクトリア時代戦略」によって実践に移された (FR: 64-65)。この戦略において教育を受けたアフリカンアメリカンのエリートは、無知で衝動的なアフリカンアメリカン民衆のために犠牲的に尽くす文化的指導者となる。言い換えると、この戦略は、高水準の教育を受けた少数のアフリカンアメリカン (すなわち『才能ある十分の一』=the Talented Tenth) が教育機関 (大学など) や政治組織 (政党など) の運営を通して、アフリカンアメリカン民衆を指導するというものである⁵⁾。こういった教育機関や政治組織は、無知で衝動的なアフリカンアメリカン民衆の価値観や世界観の形成を助け、物質的・霊的な向上を促進する。

しかし『黒人のたましい』や代表的論文“The Talented Tenth”が公表された1903年の時点で、教育を受けたアフリカンアメリカンのエリートで同胞のために働く者は少なかった⁶⁾。その第1の理由としてウエストは、知的世界に生きるアフリカンアメリカンのエリートたちが、アフリカンアメリカンの民衆文化を受け入れられなかった点を挙げる (FR: 65-69)。また第2の理由として、アフリカンアメリカンのエリートは、階級的にはブルジョワジーに属していたので、その階級を超えて教育の機会を与えられなかったアフリカンアメリカンの農民や労働者のために働くことはまれであったことも挙げる。

またウエストは、デュボイスの思想の根底にアメリカに対する楽観的な見方があったことを挙げる (FR: 71-78)。民主主義の実験国家として始まったアメリカは、いずれアフリカンアメリカ

4) リンチは18世紀終わりから19世紀前半まで、警察や裁判所のない西部フロンティアにおいて犯罪者を処分するための自警団による緊急避難的・超法規的な処刑として始まった。ところが南北戦争後リンチは、南部において、アフリカンアメリカンに対する白人群集による暴力的な殺人行為となった。19世紀末には全米で年間約150件のリンチが起きた。そのほとんどが南部でアフリカンアメリカンを標的にしたものであった。南北戦争以前、アフリカ人奴隷に対するリンチはなかった。なぜなら彼らは、白人の所有物だったので、群集による暴力は所有物の損壊になるからである。しかし南北戦争後、南部の白人は解放されたアフリカンアメリカンに対して警戒心を抱くようになった。このことが1960年代終わりまで連綿と続くリンチの歴史の端を発することとなる。(鈴木, 2006b: 81-97)

5) これはデュボイスが有名な論文“The Talented Tenth” (Writings: 842-861) などで展開した「才能ある十分の一」理論である。

6) この点を、ウエストはデュボイスのヴィクトリア時代戦略の問題点として指摘する (FR: 65-69)。またウエストはRace Matter所収の“the Crisis of Black Leadership”やKeeping Faith所収の“the Dilemma of the Black Intellectual”において、現代のアフリカンアメリカンのエリートも残りのアフリカンアメリカン同胞に対して責任を果たしていないことを問題視している。

ンにも民主主義を拡大するであろう。そうデュボイスは考えていた。言うまでもなく、このデュボイスの楽観的予測はただちに打ち砕かれた。

1.3. デュボイス・ワシントン論争について

有名なデュボイスとブッカー・T・ワシントンとの間の論争は、20世紀のアフリカンアメリカン社会内部で交わされた、解放をめぐる論争の枠組みを提示した⁷⁾。両者の間には、アフリカンアメリカンの闘争がどうあるべきかについての見解の一致は見られる。すなわち両者はともに、法律・政治・経済といった手立てを用いた、非暴力的改革による闘いをアフリカンアメリカンに勧めている。両者間に違いが見られるのは、その内容についてである。ワシントンはアフリカンアメリカンの自助努力を説いた。そして当時ゆるやかに増加していたアフリカンアメリカンの富裕層とともに、残りのアフリカンアメリカンが農業労働者となっていくことを推し進めようとした。これに対してデュボイスは、アフリカンアメリカンの社会的・政治的地位の向上を目指す抵抗運動を支持した (PD: 40)。

ウェストの目から見ると、デュボイスもワシントンもプチブルジョワ的立場から発言しており、彼らの主張はアフリカンアメリカンの独自性を認めるものではない。ワシントンの主張は、アメリカのメインストリームである白人にアフリカンアメリカンの文化や道徳性を認めさせようとするあまり、アフリカンアメリカンの最もクリエイティブな部分を奪ってしまっている (KF: 26)。すなわち、ワシントンは白人社会の尺度でアフリカンアメリカンの文化や生活様式、道徳的ふるまいを評価し、これらの程度が白人社会のそれよりも劣っているとみなす。その上で、教育を通してそれらを向上させようというというのが、ワシントンの教育論の眼目である。そしてデュボイスの唱える「才能ある十分の一」は、そもそもアメリカ文化のメインストリームである中産階級に属す存在である (KF: 26-27)。これも白人の受ける教育に対する劣等感がその前提にある。ワシントンもデュボイスも、白人の用いる文化や道徳性の尺度に縛られているという点で「二重意識」から解放されているとは言えない。

7) ワシントンの主張は、アフリカンアメリカンは人種不平等を受け入れ、白人社会の支援を受けて職業教育を行い、経済的自立を果たすべきであるというものであった。この主張は、1895年のアトランタで開催された産業博覧会での演説で述べられた。そのため「アトランタの妥協」と呼ばれた。ここに表立って体制を批判しない「黒人保守」(Black Conservatism)の伝統が始まる。それに対してデュボイスは『黒人のたましい』所収の論文「ブッカー・T・ワシントン氏とその他の人たち」の中で、ワシントンの「アトランタの妥協」は政治的権力、公民権の主張、黒人青年の高等教育と失うものが大きいと主張した (DuBois, 1903, *Writings*: 400=1992: 75)。また、経済的自立のために職業教育を充実させるというワシントンの教育論に対しても、「もし金銭を人間の訓練の目的にするなら、蓄財家はつくれるかもしれないが、必ずしも人間をつくれまいであろう。もし技能を教育の目的にするなら、職人は養成できるかもしれないが、けっして人間を育てることにはならないであろう」と批判した (DuBois, *Writings*: 842, 訳は鈴木, 2006a: 300)。デュボイスは職業教育を全面的に否定したのではない。「あらゆる真の教育の目的は、人間を大工にすることではなく、大工を人間にすることである」(DuBois: *Writings*: 855)と主張した。

1.4. 黒人のたたかい

ウエストはデュボイスの著作を批判的に読むことから、「黒人のたたかい」(Black Striving)と何であるかを打ち出そうとする。「黒人のたたかい」とは、ウエストの見解を要約すると、アメリカ社会においてアフリカンアメリカンが見えない存在とされ、名前(すなわち個性)を奪われた状態、つまり「不可視性と匿名性」(invisibility and namelessness)を超えて、アフリカンアメリカンの自己愛と自己尊重に基づいた〈黒人文化〉を築くことある。

このアフリカンアメリカンの「不可視性と匿名性」は、4つのレベル—実存的、社会的、政治的、経済的—において見られる。ウエストはこの中で、実存的レベルを問題とする(FR: 80)。アメリカにおいてアフリカ人であるということは、その人格をまともに認められないまま、様々な困難な問題に直面し、対処していかなければならないということである。「黒人」であるということは、すなわち「その黒い身体が嫌悪の対象として見られ、黒人の考えることや理想とすることが劣ったものとされ、黒人の痛みや悲しみが人間性や道徳性の規模においては取るに足りないものとされるということである。」(FR: 80)

ウエストによると、このアフリカンアメリカンの不条理こそが、アフリカンアメリカン文化を生み出す状況である(FR: 80)。アフリカンアメリカン文化は、アフリカンアメリカンだけが味わう悲嘆や苦難、絶望といった経験に完全に屈服することなく、力強く生きる人々の表現の様式である。アフリカンアメリカン文化の原テキスト(ur-text)は、言葉や文字、建築といったものではなく、しわがれ声の叫びや深いうめきである。こういった叫びやうめきをアーティスティックに表現したものが、アフリカンアメリカン文化の所産である(FR: 81)。

自分たちが置かれている不条理に対する文化的抵抗としてのアフリカンアメリカン文化は、3つのアフリカの伝統を備えている。それは(1) 動的口頭性(a kinetic orality)、(2) 情熱的身体性(a passionate physicality)、(3) 闘争的スピリチュアリティ(a combative spirituality)である⁸⁾。この3つのアフリカの伝統は、アフリカンアメリカン教会の礼拝に出席すると感じることができる⁹⁾。説教は躍動的なレトリックを用いてブルースのように朗々と語られ、聴き手は交唱のように「アーメン」と叫ぶ。祈りもそうである。讃美の時には聖歌隊も出席者もリズムにあわせて情熱的に身体を動かす。そして教会の働きには、単に礼拝でなぐさめを語るだけではなく、解放への実践も含まれている。アフリカンアメリカンを軽視する社会において「他者」として生きる彼らも、教会では偽ることなく安心して自己を表明することができるのである。

8) この点はウエストの著作で繰り返し言及されていることから、ウエストのアフリカンアメリカン文化論の要諦である(例、FR: 81, PF: 5-6)。ここではアフリカンアメリカン教会をモデルとして挙げたが、ウエストは他にもジャズといった音楽やトニ・モリソンといった文学にもこれらの伝統が受け継がれていると述べる(FR: 81など)。

9) この点について筆者は、『アメリカのキリスト教がわかる』(2006)、99-100で言及した。

2. マーティン・ルーサー・キング Jr.

ウエストは最初の著作選 *Prophetic Fragments* の巻頭に “Martin Luther King Jr.” を掲載した。この論文はマーティン・ルーサー・キング Jr. (以下、キング) の思想に対する系譜学的アプローチを試みる。ここでウエストはキングを、「精神の生活」¹⁰⁾ を道徳的説得力と政治的実効性に結びつけることに成功した「有機的知識人」と称える (PF: 3)。ウエストはこのキングの「精神の生活」の基盤となった4つの要素を挙げ、それらについて詳論する。その4つの要素とは、(1) 預言的アフリカンアメリカン教会の伝統、(2) 預言的かつリベラルなキリスト教、(3) 非暴力により社会変革を果たしたガンジーの預言者の手法、(4) 預言的なアメリカ市民宗教である。

2.1. 預言的アフリカンアメリカン教会の伝統

この4つの要素の中でウエストが特に注目するのが、預言的アフリカンアメリカン教会の伝統である。アフリカンアメリカン教会は、「はっきりと目に見えて特徴的な合衆国の黒人の文化的所産」(PF: 4) である。ウエストはアフリカンアメリカン教会をこう定義する。「アフリカンアメリカン奴隷が、しばしば命の危険にさらされながらもイエスを選び、キリスト者としての共通の目的意識を持ち、自分たちの状況についてのキリスト教的理解を共有した時に誕生した、多様な教派によって構成されるキリスト者の群れである。」(PF: 4) このアフリカンアメリカン教会は、アフリカンアメリカン自身により形成、継続、統制されている制度であるという点で、アメリカ文化においてユニークな存在であると言える (PF: 4)。

アフリカンアメリカン教会は、「生まれながらの疎外」(natal alienation)¹¹⁾ を生きるアフリカンアメリカンの実存的・政治的生の状況に対する共同の応答である (PF: 4)。すなわち、アフリカンアメリカンが奴隷だった時代、彼らは生まれる前から搾取され、抑圧され、軽蔑され、支配されていた。そしてその末えいである現代のアフリカンアメリカンたちも、生まれながらに困難な状況に置かれている。アフリカンアメリカン教会は、アフリカンアメリカン一人一人の経験を聴き、その経験の意味を彼らとともに探究したのである。

アフリカンアメリカン教会はキリスト教の世界観を創造的に借用して、アフリカンアメリカンの圧倒的不条理と永続する悲劇をこう理解した。アフリカンアメリカンは永久的に十字架にはり

10) 「精神の生活」(the life of the mind) は、ハンナ・アーレントが『精神の生活』で提唱した概念である。アーレントは生活を単なる衣食住と見る経済学な見方を批判し、生活を「精神の生活」と「活動の生活」に分ける。精神の生活は、おもに思考すること (thinking)、志すこと (willing)、判断すること (judging) によって構成される。すなわち、自分自身でよく考え、志を立てて、意思決定することが「精神の生活」である。それに対して、「活動の生活」は労働や仕事、活動が含まれる。(Arendt 1978=1994) ウエストもこの概念をアフリカンアメリカンの知識人の存在を指して用いる (ex. KF: 67, 68)。

11) *Keeping Faith* 所収の “Cultural Politics of Difference” において、この「生まれながらの疎外」について、「ディアスポラ・アフリカ人が生まれながら永遠不変に支配されるという状態は不可視性と匿名性という現代のディアスポ黒人の抱えている問題を作り出した」(KF: 16) と述べる。

つけられ、苦しみ、蔑まれる「聖金曜日の存在」なのである。しかしアフリカンアメリカンにとって、イエスの道徳的生涯、苦しみに満ちた死、奇跡的復活は悪に対する圧倒的勝利を示している。アフリカンアメリカンはイエス・キリストとの非常に強い個人的つながりを自覚し、このイエスの勝利という希望によってエンパワーされている (PF: 5)¹²⁾。

アフリカンアメリカン教会の神学は、アフリカンアメリカン独自の特徴を伴ってはいるが、伝統的なアウグスティヌス主義である (PF: 6)¹³⁾。すなわちアフリカンアメリカンの抑圧の経験を通して、プロテスタントが強調する教義—例えば神の支配、罪と恩恵、赦しと愛—を重視する。アフリカンアメリカンの抑圧の経験は、神の救いの計画とアフリカンアメリカンの解放とを結びつけた。そしてアメリカのレイシズムがアフリカンアメリカンに強要してきた文化的感覚や社会的役割を打ち捨て、まったく異なるアイデンティティーを確立するための力を、アフリカンアメリカンの神学はその民衆に授けた。キングは幼い頃に身につけたこのようなアフリカンアメリカンのキリスト教の世界観によって、直面する悪の問題を捉え、それに立ち向かう力を得たのである。

このアフリカンアメリカン教会の視点は、キングにその思想の基盤を提供した。だからこそキングが学生時代にリベラル・キリスト教やガンジーの愛と社会変革の思想、預言的市民宗教と魅了された時も、アフリカンアメリカン教会の神学は彼の関心をアフリカンアメリカンが直面している問題につなぎ止めた。リベラル・キリスト教の神学、ガンジーの思想、預言的市民宗教は、彼の思想の基本原理解であるアフリカンアメリカン教会の影響を補完するものにすぎない (PF: 8)。

2.2. 預言的リベラル・キリスト教

次にキングに見られる預言者のリベラル・キリスト教の影響について論じる。モアハウス大学で社会学を学んだことでキングは、南部の白人キリスト者の偽善者的な側面を見抜き、それに対して神学的・道徳的批判を強めた。またクローザー神学校ではジョージ・ディヴィス、ボストン大学ではL・ハロルド・デウルフから強い影響を受けた (PF: 8)。ディヴィスは、神は人間の歴史に親密かつ密接に働きかける方であると主張する。また、ラウシェンブッシュの社会福音をキングに説いたのもディヴィスである。人格主義哲学の立場に立つデウルフから手ほどきを受けたことも、キングの語る言葉に影響を残した。

2.3. ガンジーの預言的手法

キングがガンジーについて知り、その手法を学んだのはボストンでの学生時代である。しかし

12) この点は黒人の神学だけでなく解放の神学が一貫して主張していることである。例えば、Cone 1970: 110-128.

13) 「伝統的なアウグスティヌス主義」とは、この場合、プロテスタントの「標準的な」教理を指している。ルターの義認論はアウグスティヌスの罪論を基盤にしている。また、カルヴァンもアウグスティヌスの著作に基づいて福音信仰の基盤を築いた。この北アフリカ出身の神学者アウグスティヌスを信仰のルーツとして挙げるのは、黒人の神学の特徴とも言える。

キングはバスボイコット運動の当初、この運動をソローの「市民的不服従」と結びつけて考えていた。しかしこの運動が高揚する中で、白人の図書館司書が新聞への投書で、アフリカンアメリカンが取っている社会変革の手法がガンジーのそれと同じであることを指摘した。それ以来、キングはガンジーを強く意識するようになった（大宮2004: 19-20）。

というのもキングは、学生時代からマルクスやニーチェによる宗教批判を真摯に受けとめ、この批判に対する応答を探っていた。ガンジーの思想を学び、その手法を用いてレイシズムと闘う中で見つけた応答は次の通りである。すなわち「多くの宗教が人々に服従を強いるものであったとしても、預言的キリスト教は自由と正義を獲得するために抑圧と闘う民衆をエンパワーする。」（PF: 9）またニーチェのルサンチマンや復讐といった概念についても、キングは「抵抗は悪を実行する人に対してではなく、悪そのものに対して」¹⁴⁾と主張することによって克服した。このようにガンジーによって導き出された「愛（アガペー）に動機づけられた非暴力抵抗という手法」を実践する時、キングはマルクスとニーチェの宗教批判を克服できたのである。

2.4. アメリカの預言的市民宗教

キングが「私には夢がある」と語った時、その「夢」とは民主主義・自由・平等といったアメリカ建国の理念に結びついたものであった。アメリカ独立革命の指導者たちは、独立への闘いを出エジプトに見立てて、アメリカ大陸を約束の地とした。キングは1968年の時点で、アメリカの外交政策が中南米やヴェトナムに介入していくのを目の当たりにしていた。そして彼は、アメリカが民主主義・自由・平等といった独立の理想を思い起こし、それをアメリカだけで独占するのではなく、国際化していくことを主張したのである。

2.5. キングの現代的意義

ウエストがアメリカに対する批判を展開する際には、キングの愛の思想に立ち返ることがある。例えばウエストは9.11を「アメリカ全体の黒人化」であるとする（福音と世界: 17）。すなわち、かつて南部で黒人が黒人であるがゆえにリンチにあったのと同じように、アメリカはアメリカであるがゆえに予期せぬ暴力にさらされ、憎まれているのである。そうした状況においてアメリカ全体がどこへ向かうべきなのかを、「キングならどうするか」と問うことにより決定すべきだとウエストは主張する。キングなら、武器を取ってイラクに侵攻することは考えない。むしろキングなら、アメリカ国内の21%の子どもが貧困にあえいでいることの方を憂慮するであろう。このようにウエストはキングを引き合いにして、人種を超えて全てのアメリカ人がテロに対する闘いではなく、貧困問題に関心を持たねばならないことを示す。

14) この考えはキングが愛敵論について述べる論文や説教、スピーチに必ず出てくる。最初に言及されたものとして、1957年2月6日発行の雑誌*Christian Century*に掲載された論文“Nonviolence and Racial Justice”が挙げられる。ここには非暴力の4つの原則が挙げられている。その原則の1つが「非暴力の敵は悪そのものであって、悪にとりつかれた人間ではない」である（大宮, 2004: 21）。

3. マルコムXについて

ウエストはマルコムXを「黒人の怒りの預言者」(the prophet of black rage)と呼ぶ。ウエストが彼をそう呼ぶのは、彼の「黒人への大きな愛」と「いかなる犠牲を払おうとも黒人の人間性を肯定する深い献身と、アメリカ社会の偽善を強調する凄まじい勇氣」(RM: 136 [143]) ゆえである。

3.1. 精神的回心

マルコムXについての論文(*Race Matters*所収の論文‘Malcolm X and Black Rage’)の中でウエストは、マルコムX自身が成し遂げ、かつ同胞にも訴えた精神的回心(psychic conversion)に注目する。この精神的回心とは、アフリカンアメリカンの精神に深く根付いているとデュボイスが指摘した、二重意識に対する批判であった(RM: 139 [146])。二重意識とは、アフリカンアメリカンの世界と白人世界の間で「どっちつかず」の生き方をしているアフリカンアメリカンの精神的状態のことである。このような「どっちつかず」の状態にある者は、白人からもアフリカンアメリカンからも仲間として認められないのは当然のことである。にもかかわらず、彼らは白人社会に認められようと努力する。マルコムXはこのような二重意識を批判し、これを精神的回心により打破するよう勧告した。

この精神的回心とは、「黒人は自分自身を人間として肯定し、もはや自分自身の肉体と精神と魂を白人のレンズを通して見るのではなく、自分自身の運命を自分自身で支配できるようになる」(RM: 136 [143]) ことである。言い換えると、精神的回心とは、被抑圧者が自己肯定と自己決定を勝ち取ることである。

精神的回心には、昔も今も危険が伴う。アフリカンアメリカンがこの精神的回心を遂げようとすれば、マルコムXの時代(1950-60年代)ならリンチにあってもおかしくなかった。また現代においても、白人世界に生きるアフリカンアメリカンのエリートたちが—例えマルコムXに共感していたとしても—公然とマルコムXの思想に対して肯定的な発言をすることはない。それは今もってエリートの精神的回心が、その社会的地位を危険にさらすことを意味している(RM: 137-138 [145])。

ウエストはマルコムXの精神的回心の問題点を2つ挙げる。第1にマルコムXは、アフリカンアメリカンの間に白人に対する態度について異なる立場があることを、「家の黒人」(the house Negro)と「畑の黒人」(the field Negro)という区分によって明らかにした¹⁵⁾。裕福なアフリカン

15) 「家の黒人」「畑の黒人」という区分は、1963年1月23日にミシガン州立大学で行われた講演会で展開された。「家の黒人」は、主人に近いところで暮らし、主人の食べるものの残りを食べ、主人のお古の服を着た。彼らは主人が病気になると心配し、仲間の幸福より主人の幸福を考えた。それに対して、「畑の黒人」は奴隷小屋に暮らし、最悪の食事を取り、最悪の服を着た。主人が病気になるといっそ死んでしまえと祈った。(Jenkins, 2002=2008: 329)。本文は<http://ccnmtl.columbia.edu/projects/mmt/mxp/speeches/mxa17.html> (2014年6月25日取得)。

アメリカン（＝家の黒人）は白人に対して友好的であるが、貧困にあえぐアフリカンアメリカン（＝畑の黒人）は白人に対して敵意を抱いていると彼は主張した。その上でマルコムXは自身を「畑の黒人」とできるとし、アメリカの真の革命は「畑の黒人」が独立、自由、正義、土地を要求することから始まると主張した。しかしこのような言説は、ウェストが指摘するように的を射たものではない。なぜなら富裕なアフリカンアメリカンが差別に満ちた白人世界に対して妥協的であるとは限らないし、他方で貧しいアフリカンアメリカンだけが白人世界に対して怒りを抱いているとも限らない。

第2に、マルコムXは黒人民族主義（Black Nationalism）こそ、アフリカンアメリカンの自己愛と自己決定を意味するものであると考える傾向があった。しかし黒人民族主義の代表的な人物であっても、マーカス・ガーヴィーのアフリカ回帰運動は帝国主義的なものであった。またイライジャ・ムハマドの黒人分離主義は、白人との「（どちらの人種が優秀かを競う）優越主義のゲーム」にすぎなかった。ウェストは精神的回心が黒人優越主義にすり替わってしまいがちであることに警戒する。言い換えれば「自分たちはすばらしい」という考え方が「自分たちはあの人たちよりも一誰よりも一すばらしい」にすり替わってしまうと、新たな差別を生み出すことになる。ウェストの以下の指摘は示唆に富んでいる。「ここでの私の要点は、黒人民族主義者たちによって正しく目標設定された問題に焦点を置くことや、黒人民族主義者たちの洞察に対して開かれていることが、必然的に黒人民族主義者たちのイデオロギーを受容することには帰着しないということである。」（RM: 141 [149]）

3.2. アフリカンアメリカンの怒りの方向づけ

確かにアフリカンアメリカン民衆の怒りは社会変革の動機になる。しかしそのエネルギーはあまりにも破壊的で、自己破滅を招きかねないほどである。それゆえキングは、アフリカンアメリカンの怒りとその運動を、政治的組織と非暴力思想によって道徳的に方向づけようと試みた。ではマルコムXは、どのようにアフリカンアメリカンの怒りを方向づけたのであろうか。

ウェストは2つの点を指摘する。まずマルコムXは、白人優越主義の裏返しである黒人優越主義を受け入れなかった。マルコムが最初に属していたネイション・オブ・イスラム（NOI）のイライジャ・ムハマドは、白人の起源について黒人優越主義に特有の思想を用いて、白人優越主義に反撃したが、それは優越主義のゲームにすぎない（RM: 142 [150]）。マルコムXは1964年まで、イライジャ・ムハマドの忠実な弟子であった。それは教会や音楽よりも、NOIの方が建設的にアフリカンアメリカンの抱く怒りを方向づけられると、彼が判断したからである。しかし彼はイライジャ・ムハマドの唱える独特の黒人優越主義を受け入れたことは一度もなかったとウェストは主張する¹⁶⁾。

16) キングが人種統合主義を主張したのとは対照的に、マルコムXは人種分離主義を主張したというのが通説である。しかしウェストのこの主張は、そのような単純な図式化がマルコムXの思想を正確に示していないというものである。ウェストは、マルコムXは精神的回心をしたものの、NOIに属している間も黒人優越主義を否定していたというものである。

次に、マルコムXはアフリカンアメリカンの怒りが彼岸で解決されるという感傷的なロマンスを受け入れることはなかった (RM: 143 [152])。アフリカンアメリカンの教会や音楽は、レイシズムに対する怒りを、天国へのあこがれや甘ったるい性愛を歌うブルースにすり替えてしまっているのではないかと彼は考えた。しかしキングが率いた公民権運動のうねりは、アフリカンアメリカン教会から起こったものである (RM: [152])。またジェームズ・コーンも指摘していることであるが、“I love you baby”を繰り返すブルースであっても、そこにはアフリカンアメリカンの目から見た人間実存の真理と、解放のために団結する際に直面する困難が表現されている (Cone 1972=1983: 218)。

3.3. 文化的雑種性に対する恐れ

マルコムXは他の黒人民族主義者と同様に、アフリカンアメリカンの生活様式や音楽、宗教といった文化は純粋にアフリカ的なものであるべきであって、異なるもの、とりわけヨーロッパ的なものが混入することを恐れた。マルコムXにとって、アフリカンアメリカンの文化が雑種性を帯びていることは憂慮すべき事態であった。なぜなら白人文化の影響を受けることにより、(1) 白人優越主義の邪悪な性質を軽視することになってしまうのではないか、また(2) 白人とアフリカンアメリカンが密接に結びつくことにより、アフリカンアメリカンが白人の抑圧から解放される可能性を遠ざけてしまうのではないかという点を、彼は恐れたからである (RM: 146 [154], FR: 154)。1964年に2回目の回心を果たした後も、この文化的雑種性に対する恐れは、彼の心を捉えて離さなかった。

このマルコムXの文化的雑種性に対する恐れに関してウエストは、アフリカンアメリカンの文化は徹底して雑種的なものであると主張する。アフリカンアメリカンの文化は、アフリカ的なものとヨーロッパ的なもの、アメリカ先住民的なものが複雑に混じり合って、「まったく新しく、かつ黒人的な何かを構成しているのである。アフリカンアメリカンの文化に見られる雑種性の例に、ジャズを挙げる。アフリカの新世界の儀礼的なものとヨーロッパの言語と楽器が出会わなければ、ジャズは生まれなかった (FR: 81)。純粋にアフリカ的なものだけでは、アフリカンアメリカンの文化は生まれなかった。むしろアフリカンアメリカン文化の持つ雑種性こそが、その文化を豊かにしたことを認めなければならない¹⁷⁾。

3.4. マルコムXの現代的意義

マルコムXはアフリカンアメリカンが何に対して怒りを抱いているかを明確にし、彼らの人間性を力強く表明した。「しかしながら、精神的回心、文化的雑種性、黒人優越主義、権威主義的組織、性別の境界と範囲、その他の問題すべてが、現在、大きく浮かびあがっている。」(RM:

17) このウエストの見識は、特に目新しいものではない。しかし、マイノリティの文化であれ、メインストリームの文化であれ、しばしば仮想でしかない「純粋な文化」を声高に叫び、外来のもの・異質なものを仮想の「純粋な文化」から排除しようとする動きに対して、この見識は警鐘を鳴らす。

149 [158]) 現代の私たちがマルコム X から何かを学ぶとするならば、彼の精神的回心の概念を拡大していくことである。この精神的回心とは、アフリカンアメリカンの社会、人間性、愛、思いやり、関心が根を下ろして成長することのできるネットワークやグループを強固にすることである (RM: 149 [158])。このようにウェストは、マルコム X の文化的雑種性への恐れを克服するよう勧める。すなわち「あれか/これか」的見解、教条主義的宣言、優越主義的疑いのある現実に対して、変幻自在で、流動的で、柔軟性のある即興の様態で存在するべきだ」(RM: 149 [158]) というのである。

まとめ アフリカンアメリカンの社会思想の系譜からウェストが明らかにしたこと

ここまで私たちは、デュボイスから始まるアフリカンアメリカンの社会思想の系譜をコーネル・ウェストの視点から俯瞰した。ここからアフリカンアメリカンの思想が、アフリカンアメリカンの悲しみや苦しみで満ちた声にならない声に耳を傾け、彼らの苦境の原因を分析し、白人によるレイシズムという悪を厳しく批判し、その苦境からの解放に強い関心を抱いてきたことが明らかになった¹⁸⁾。それに対して、メインストリームの社会思想が声なき者の声に耳を傾けず、社会の悪をテーマとしない。ここにアフリカンアメリカンの社会思想の独自性がある。すなわち、デュボイスはアメリカ社会に厄介者として生きる者の抱える問題を二重意識という概念で的確に指摘し、「才能ある十分の一」が主導する教育と政治による解放の道筋を唱えた。またキングは、アフリカンアメリカンの教会を基盤にしてリベラル・キリスト教思想やガンジーの非暴力という手法、預言的市民宗教を取り込んで公民権運動を道徳的に導いた。キングの思想の源であるアフリカンアメリカン教会は、「不可視性と匿名性」を強いられたアフリカンアメリカンのしわがれ声やうめき声から形成された文化的所産である。最後にマルコム X は、アフリカンアメリカンに精神的回心により二重意識から自らを解放するよう強く勧めた。彼はアフリカンアメリカンが抱く差別に対する怒りをよく理解していた。だからこそ、この怒りを正しく方向づけることに努めた。現代の視点から見れば、この3人の思想には家父長的性質やホモフォビアの性質といった課題も残る。それでも彼らの思想には、現代的な意義がある。

そしてアフリカンアメリカンの社会思想の系譜を通してウェストが明らかにしたことは、思想・文学・音楽・映画といった彼らの文化が持つ社会変革の力である。彼らの文化はアフリカンアメリカンの怒りや人間性を力強く表現する。こうした文化は被抑圧者の不条理な状況をコンテクストとして、白人社会から押しつけられる画一性・等質化を跳ね返し、差異と多様性を打ち出す。これについては「新しい差異の文化政治」(the New Cultural Politics of Difference)として、別の論文で展開される (KF: 3-32)。

18) ウェストのアフリカンアメリカン哲学の定義は以下の通り。「アフリカンアメリカン哲学は、アフリカンアメリカンが今立ち向かっている問題に対する対応を示す価値ある規範を提起する、文化的な遺産や政治的な闘いに着目したアフリカンアメリカンの歴史の解釈である。」(West 1977-1978: 122-123)

コーネル・ウエスト主要文献

- 1977-1978, "Philosophy and the Afro-American Experience," *Philosophical Forum* 9: 117-148.
- 1982, *Prophecy Deliverance!: An Afro-American Revolutionary Christianity*, Philadelphia: Westminster. [PD]
- 1988, *Prophetic Fragments: Illuminations of the Crisis in American Religion and Culture*, Grand Rapids: Eerdmans. [PF]
- 1989, *The American Evasion of Philosophy*, Madison: The University of Wisconsin Press. [AE]
- 1991, *The Ethical Dimensions of Marxist Thought*, New York: Monthly Review Press. [ED]
- 1993, *Keeping Faith: Philosophy and Race in America*, New York: Routledge. [KF]
- 1993, *Race Matters*, Boston: Beacon. (=2008, 山下慶親訳『人種の問題 アメリカ民主主義の危機と再生』新教出版社。) [RM]
- 1996, *The Future of Race*, New York: A.A. Knopf (with Henry Louis Gates, Jr.). [FR]
- 1999, *The Cornel West Reader*, New York: Basic Civitas Books. [Reader]
- 2004, *Democracy Matters: Winning the Fight against Imperialism*, New York: Penguin. (=2014, 越智博美他訳『民主主義の問題：帝国主義との闘いに勝つこと』法政大学出版局。) [DM]
- 2008, 「キング博士の生涯とその遺産」『福音と世界』63(10): 15-19. ※2007年2月2日にブラウン大学で行われた Martin Luther King Jr. Lecture の『福音と世界』編集部による訳 [福音と世界]

その他の引用文献

- Arendt, Hannah, 1978, *The Mind of the Life*, 2 vols. (vol. 1=Thinking, vol. 2=Willing), New York: Harcourt Brace Jovanovich. (=1994, 佐藤和夫訳『精神の生活』[上・下] 岩波書店).
- Cone, James H., 1970, *A Black Theology of Liberation*, Philadelphia: Lippincott.
- , 1972, *The Spirituals and the Blues: An Interpretation*, New York: Seabury. (=1983, 梶原寿訳『黒人霊歌とブルース アメリカ黒人の信仰と神学』新教出版社.)
- DuBois, William Edward Burghardt, 1903, *The Souls of Black Folk*, Chicago: A.C. McClurg. (=1992, 木島始他訳『黒人のたましい』岩波書店.)
- , 1987, *DuBois Writings*, New York: The Library of America. [Writings]
- Jenkins, Robert L. ed., 2002, *The Malcolm X Encyclopedia*, Westport, CT: Greenwood. (=2008, 荒このみ訳『マルコムX事典』雄松堂.)
- 大宮有博, 2004, 「マーティン・ルーサー・キングJr. の愛敵論」『関西学院大学キリスト教と文化研究』5: 13-30
- , 2006, 『アメリカのキリスト教がわかる』キリスト新聞社.
- 栗林輝夫, 2004, 『現代神学の最前線』新教出版社.
- 鈴木健二, 2006a, 「白人との協調か黒人の主体性か——ブッカー・T・ワシントン『奴隷より立ち上がりて』」佐々木隆・多田浩二編『史料で読むアメリカ文化史③ 都市産業社会の到来 1860-年代1910年代』東京大学出版会, 295-307.
- 鈴木透, 2006b, 『性と暴力のアメリカ——理念先行国家の矛盾と苦悶』(中公新書) 中央公論新社.